



ハプニングもまた旅なり

～ウイーン、ザルツブルグ、グラーツを訪ねて～

NARUMI TANAKA

プロローグ

昨年は大地震、義母の逝去等と悲しい事が相次ぎ、企画していたメキシコ行きもキャンセルになった。今思えば、何かと不遇な1年であった。

ところが、地震から数か月が経ち、ある程度の落ち着きを取り戻したある日、「ウイーンにミニロングステイ 2 週間」の案内が目飛び込んできたのだ。

この企画は NPO 法人「ワールドステイクラブ」の会員 M さんの企画だった。「ワールドステイクラブ」というのは、「世界で創ろう シニアの生きがい」を合い言葉に中高年が集う、国際交流団体である。

海外日本語ボランティア、海外・国内旅行、海外滞在・語学研修等の活動を通して、充実したシニアライフを目指す団体だ。

東京が拠点なので何の活動にも参加できないが、ただ「ワールドステイ」という言葉に魅かれて会員になっているようなものである。

それでも時々、会員の有志がボランティアで「ワールドステイ」の名にふさわしい旅行プランを立て参加者を募集される時には、(参加してみたい) という気にさせられる。

今回のウイーンにミニロングステイを企画された方は、ある大手の旅行会社を退職された M さんということで、もちろん面識も何も無い人だ。

そんな M さんの旅行プランは、午後は殆どがフリータイム、後半の 1 週間は自由行動といった感じの自由度の高い旅で、そんな旅行が大好きな私にはとても魅力的な内容だった。

そっさく参加を決意したのは、まだ残暑厳しき折の今年の 9 月であった。

これまで、どちらかと言えば、発展途上国に行く機会が多かった私だが、人類遺産の言わば「陽の当たる場所」を体験するのも、人生の仕上げ時期においては大事な事ではないかとの思いもあった。声をかけると、以前メキシコ行きを決意していたお二人とその中のお一人の従姉さんが、早々と同行即決してくださった！

この勇気あるシニア女性 4 人のチャレンジ旅行。

舞台は訪れた人もとても多い、ウイーン、ザルツブルグ、グラーツである。今さら説明も要らない感じのする場所ばかりである。

今回の私達は日本の一般的なツアーがなかなか行かない、南の古くて小さな都グラーツまで足を延ばすことができたが、やはりウイーンと似ていて、今さら何の説明も要らない感じである。

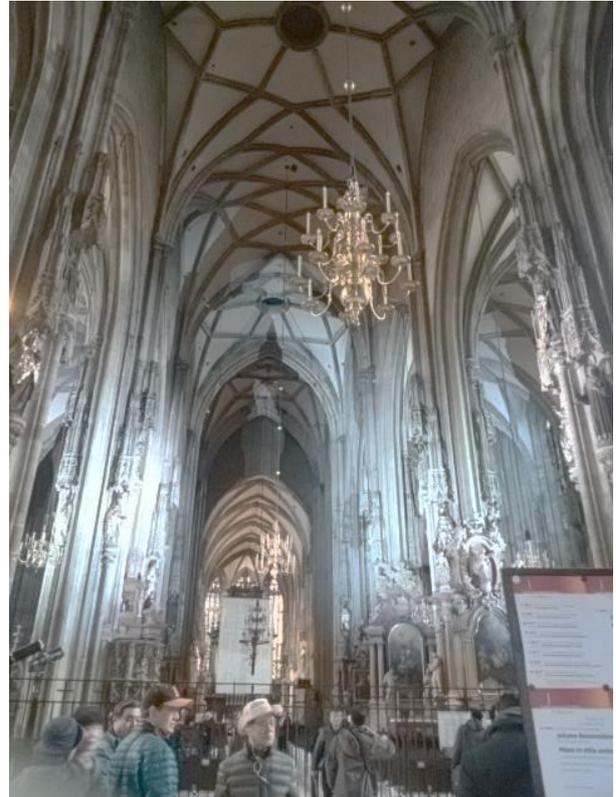
そこで、今回このエッセイでは、大きなハプニングを中心にまとめてみた。

その失敗や驚きに見え隠れするものは何でしょうか。

御笑読ください。



モザイクが個性的なシュテファン寺院



中は荘厳な雰囲気にもまれる

1、あつ、財布がない！！

本当は、この事は秘密にしておきたい、誰にも言わずにおきたい私である。しかし、この悪い経験が、これから海外へ行かれる方の参考になれば、との思いで書くことにした。

そう、私はスリにあったのだ！約7万円ほど盗られたのだ。

今思い出しても、本当にショッキングで悔しい思いに苛まれる。

「なぜ私が？」と、今でも考えてしまう。

これまで数多くの国へ自由旅行をしてきた。そして、たった一度もこんな災難に遭ったことが無かった。

例えば、スリがとても多いと言われるスペインのバルセロナの地下鉄、それにも一人で乗ったのだが、何事もなかった。駅では日本語のアナウンスが、「スリが多いのでご注意ください」と、いつも流れている様な所であるのだ。

また、同じバルセロナで買い物をしていた時に、ボンヤリしていつの間にかリュックのファスナーが開いていたこともある。店員さんが、「リュック開いていますよ。危ないですよ」とにこやかに教えてくれて、青くなって慌てて中身をチャックしたが、何も盗られていなかった。

それなのに、なぜ今回、しかも東京からの6人の皆さんと一緒に時の10人のグループ時、その中からたった一人私だけ？

その日は、リーダーのMさんも一緒に総勢11人で、午前中だけガイドさんを付けての市内観光をしていた。

モーツァルトハウス、ペーター教会、国立オペラ座、ペスト記念柱等、市内に数多くある名所をガイドさんの説明を聞きながらゆっくりと散策した。そして、最後に私達グループがやって来たのは、天を突くようにして市の中心にそびえ立つ「シュテファン寺院」だった。

ガイドさんが「今から寺院の中に入りますが、スリが多いですので貴重品には十分気を付けてくださいね。」と言われたのを聞いて、私はスマホをコートのファスナー付きのポケットに入れ、しっかりとファスナーを締めた。そして、財布もダウンコートの内ポケットに入れようとしたが、かさばるのでリュックの中のファスナー付きのポケットに入れ、しっかりと締めた。これが間違いの元だった！プロのスリ犯は知っている、大事なものはそこに入れてあるのを。

また、クレジットカードが入ったケースはリュックの後ろ(私の背中にくっつくところ)にあるファスナーポケットに入れ、これもしっかりと締めた。(結果的には、この場所は安全のようだ。何も盗られていなかった。)

「よし、これで大丈夫！」と、今までの経験からすっかり安心して、リュックをからった。

寺院の中は圧倒されるほどの壮大な雰囲気だった。

この寺院は12世紀の半ばに建てられたロマネスク様式の教会で、その後14～15世紀に現在の様なゴシック様式に改築されたい。

ガイドさんが、「これからこのエレベーターで塔の上に上ります。5ユーロ用意してくださいね」と言われたので、私はリュックから財布を取り出して5ユーロを用意した。だから、この時点では、まだ財布は無事であったということになる。

塔の上から眺めるウィーン市の風景に、思わず心を奪われた。また、屋根に鮮やかなタイルで市の紋章が張られているのを見て、その古さとユニークさに見入ってしまった。

この時にはもう財布は無かったのだろうか？・・・分からない。

シュテファン寺院の後、ガイドさんは王宮を通り抜け、美術史博物館へと私達を導いた。ガイドさんが「ここでは、荷物はコインロッカーに預けます。一人1ユーロですが後で戻って来ますよ」と言ったので、皆でコインロッカーに預けることになった。私ももちろん例外ではない。

その時である。背中からリュックを降ろすと、ファスナーが開いていた！

(あれ、締め忘れたかなー)と思いつつ中身を確認したが・・・無い！無い！財布が無い！！

鈴をジャラジャラと付けていたので、バッグを振れば鳴るはずだ。でも何の音もしない！何度も何度も振ってみた。無い！おまけに傘も無い！

外は曇りで、後で雨になるかもしれないと思い、持ってきたものだった。

傘も財布も無い！

リュックの中のポケットファスナーが開いていて、布地の部分が外側に引っ張り出されていた！

その時、私は何が起きたのかやっと分かって、横にいたツアーリーダーのMさんに言ったのだった。

「財布がないんです、取られたかもです！」

Mさんは驚いて、「えっ！ホテルにあるかもですよ。私も同行しますから、このままホテルに帰りますか？」熊本からのメンバー3人も「そうしよう、ホテルに帰ろう！」と言ってくれた。でも、ここの入場チケット代は既に支払い済みだし、そんな迷惑をかけるわけにもいかないのだから、「いいえ、大丈夫です。ここを見た後で自分一人で帰れます」と言ったのだった。でも実際は、頭の中は真っ白だった。

アメリカドルが値上がりしていた時期でもあったため、「よし、ラッキー」と思ってこちらで両替したアメリカドルだった。また、Mさんにコンサートのチケット代を支払うために、現地の銀行で引き出したユーロだった。

盗られた金額よりも、

(なぜ自分がすられたの？おまけに傘まで・・・)

そんな考えが頭の中で堂々巡りをし、ガイドさんの説明も耳に入らず、ただ声が頭の上を通り過ぎている感じだった。

沈み込むような重い気持ちで、いよいよ最後の展示室に入って行ったその時だった。一枚の絵が目飛び込んできた。

それはフェルメールの絵だった！

「ここにはフェルメールの絵が一枚だけありまして、『絵画芸術』という絵です・・・」とガイドさんの説明が聞こえて来た。

美術館に入って初めて絵を見た思いだった。

窓から燦々と降り注ぐ陽光、あの「青」をふんだんに使ったドレスを身にまとう少女、こちらに背を向けた画家がその少女を描いている・・・

何と美しい！！ 何と神々しい！！ 静の時間の波がこちらまで流れ来るような感じだった！

ここでフェルメールの絵に会うとは・・・大ファンである私への大きなプレゼントの様な気がした。

そして、沈み込んだ私の気持ちも、少し光が届いて軽くなった様な気がした。

芸術には人の心を癒すパワーがあるのを、改めて体験できた瞬間でもあった。



古い趣きある石だたみ



古い建築はウィーンの歴史の長さを物語る



ハプスブルグ家の繁栄を伝える王宮



フェルメールの「絵画芸術」

2、日本へ電話

美術史博物館の鑑賞ツアーが終わった。

フェルメールの絵のおかげで、少し元気が出た私は急いでホテルへ帰ってみることにした。部屋に財布を忘れていたとはとても思えないが、連れの3人さんとMさんは大いに期待していたようだ。部屋を開けてセーフティボックスの中、スーツケースの中、引き出し・・・全てを皆で調べたが、答えはNOであった。

私よりもむしろ皆さんに失望感が走った。

しばらくして3人さんが、「私達の世話でミルクさんは疲れてたんでしょう。だからボーッとってたのよ。気持ちだけだけど、これを使ってねー」と、100ユーロずつ出し合って、300ユーロを差し出してくれたのだった。

「いいよ、いいよ！現金もたくさん持って来たし、バンクカードも持ってるから引き出せるし、大丈夫よ！心配しないでいいよ！」と辞退したが、「どうしても」ということで、好意を素直に受け取ることにした。

皆さんの優しさが胸にしみるほど有難かった。

旅行の最後の日にお金はお返ししたが、災難に遭った時にどう支援するのかを教わった気がした。今でも心から感謝している。

運が悪いというか、不用心というか、財布にはJCBのクレジットカードが一枚入っていた。それをなるべく早くストップする必要があったので、高くつくとは分かっていたが、日本に電話をしないといけなくなった。

以前、海外に行く時は、持参するクレジットカードの種類や連絡先等を詳細にメモした物を用意していたが、何事も起こらなかったこともあって、次第に何もそういうことをしなくなっていた。やはり、「自分は大丈夫だ」という、「怠慢、慣れ」が見え隠れしていた。

スマホで連絡先を検索した。「海外からはコレクトコールできます」と書いてあるのにホッとして番号を押した・・・

私：「海外からですけど、コレクトコールをお願いします」

会社：「お客様はスマートフォンからおかけですか？」

私：「はい、そうですけど」

会社：「スマートフォンからおかけの場合は、コレクトコールにしてもあまり料金は変わりませんが、どうされますか？」

私：「え、そうなんですか？ では、どうすればいいんですか？」

会社：「ホテルのお電話からでしたら、コレクトコールできます」

私：「では、そうします」

と一旦スマホを切り、ホテルの部屋の電話を使ってみた。

ところが、2度も3度もかけても全くつながらない。

面倒くさくなってきた私は、スマホで全部済ますことにした。

何やかやで、やっとカードの停止ができるまでには、かなりの回数の電話をかけてしまっていた。

帰国してから請求書をチェックしてみた。海外からのコールの分は約5000円だった。これは予想より低かったので、不幸中の幸いであった。

3、警察署へ

機能停止を頼んだクレジットカード会社から、「万が一のため、盗難届けを取っておいてください」と言われたので、ひと息ついた後、警察署へ行くことになった。

もちろん海外で警察署へ行くことなど初めてだ！

同室のPさんも「私も行くよ！」と言ってついて来てくれて、これもとても有り難かった。

さっそくホテルフロントで警察署の場所を教えてもらい、近いので歩いて行くことになった。

地図では簡単に見える場所でも、来て2日目でまだ右も左も分からない所では、探すのは一苦勞である。おまけにドイツ語表示なので、これがまた困難さを加えていた。

お店や、通りがかりの人達に尋ね、尋ね回ることに30分で、やっと大きな古いビルの1階にある小さな警察署にたどり着いた。ウィーンでは、英語は皆良く使いこなせるので助かった。10人中7～8人は英語を難なく使える。また、大都会特有の冷たさもなく、みんな親切で穏やかなのには大いに救われた。

標識に“POLIZEI”と書かれているのを確かめて、勇気を出してドアを静かに開けてみた。

誰もいない！

“Excuse me.”と何度か呼んだら、まだ若くて体格の良い警察官が出てきた。さっそく英語で状況を説明し、盗難届が必要な旨を告げた。警察官はにこやかに丁寧に対応してくれた。

警察：「クレジットカードは入ってませんでしたか？」

私：「はい、一枚入ってましたが、日本に電話してストップしました」

警察：「GOOD！」

の様な会話から始まり、盗まれたと思われる時間帯や場所、金額などを詳細に尋ねられた。

「では、あなたの日本の住所をお願いします」と言われたので、英語で書いて出すと、「??? えーと、ストリート(通り)の名前はこれですか???'と地区名を指して聞いて来た。

私：「いいえ、それは地区名です」

警察：「では、ストリートの名前は？」

私：「日本では住所に、ストリートの名前は普通使わないのです」

警察：「全然?ではどうやって住所が分かるの？」

私：「地区名です」

警察：「地区名???困ったなー、ストリートの欄が埋まらないと発行できないなー、」

私：「では、地区名をストリートの欄に書いてください」

警察：「そうだねー、そうしましょう」

と、日本の住所の仕組みから説明をしないとイケなかったのは、意外であった。

また、漢字で書かれた私の署名を興味深そうに見て、「これ、ナルミ タナカって書いてるんですか?」と難しそうに私の名前を読み上げるので、思わず笑ってしまった。

(きっと日本人は盗難にあっても、盗難届を取りに来たりしないんだなー)と、この事からも推察できた。

無事に盗難届を受け取った私はホッとして、次のように付け加えた。

「財布をピックポケットされて、私は本当にショックを受けているんです。でも、今日はこうやって盗難届をいただいて、ただ諦めるのではなく、『何か』アクションをすることができて少し嬉しかったです。記念に写真を撮っていいですか?」

「OK!ちょっとお待ちください」

と、その若い警察はカウンターのこちら側に出てきた。

そして、「こうやって腕を組んで睨みつけて、私と背中合わせにポーズしなさい」と、ポーズを取った。私も言われるままにポーズを取った。どうやら犯人に「怒っているぞ」とのメッセージを届けるためらしい。

微笑ましい思いで、また心を和ませてもらった。

この警察署でのワンシーンは、写真と共に永遠と心に刻み込まれることとなった。



4、お着物でコンサート

それでも、ショックから立ち直るのは容易ではなかった。そこで、私はゴルフにヒントを求めた。「ゴルフで言えば、OBを打ったようなものだ。それを悔やんでいては、残りのホールの結果も悪くなる。ここはキッパリと思い切り、なぜOBになったのかを冷静に反省し、そこから教訓を得て次のホールに活かすのだ」と思い当たった。時として、スポーツは人生哲学にもなりうる。

そして、「大金を持ち歩かない、クレジットカードは1枚だけ持ち歩く、現金もカードもなるだけ身に付けておく。また、なるべく少人数で行動する」等等、思えば当たり前の事ばかりであるが、今後への指針を確認した。

考えるうちに、これは「慣れ」が呼び込んだ災難とも言えると分かった。

ついでに、「そうだ、〇〇会社の株がかなり上がっていたなー、帰国したら、あれの一部を売却して3倍ぐらいにして損失補てんをするんだ！」と思いついたら、途端に元気が出てきた。どこまでも負けず嫌いになった時に、エネルギーが出る自分に苦笑する、もう一人の自分もそこにいた。

そうこうしているうちに、今回の旅でのメインのイベントの一つである「コンサートへ行く」夜がやって来た。「コンサートはお着物で」との打ち合わせが出来ていたので、4人中の3人は早めに着付けを始めた。普段からよく着物で出かけるMさんは力強い助っ人だった。Mさんのおかげで、皆スイスイと着付けることができた。

お互いの着物を誉めあったり、鏡を眺めたりしながらホテルの部屋を出た。キーを預けるべくフロントに行くと、ある男性スタッフが

「Beautiful!! Have a good evening.」（きれいですねー、楽しい夜を）とにこやかに声をかけてくれた。

3人で着物を着ると迫力がグンと増し、目立ち、人々の視線を集める。

例を挙げると・・・

*地下鉄に乗っていると、通路の反対側に座っている女性たちが私達の着物を見て、ヒソヒソと話していた。着物の柄や帯のデザイン、草履などをしきりに見つめていた。思い切ってこちらから「これは日本の伝統衣装なんですよ」と英語で言うと、「We know! Wonderful! Beautiful!」(知ってますよ！美しいですね、素晴らしいです)と絶賛してくれた。

*また別の日に地下鉄を待って駅に立っていると、若い男性が「あなた達は日本からですか？私は日本のマンガが大好きで良く読んでいます。日本は素晴らしいです」と話しかけてきた。聞けば、フランス人でプロのサッカー選手だそう。その日はウイーンでの試合があったそうで、フランスへの帰路の途中とのことだった。

*また別の日だが、コンサート会場で自分の席を探していると、ある年配の女性が近づいて来てたどたどしい日本語で「キレイデスネ！スバラシイデス」とわざわざ言いに来てくれた。

*最も印象に残ったのは、コンサートが終わってから、私達の前の列に座っていたある老紳士が立ち上がり、私達の方へ向き直って「今日は日本の伝統衣装でコンサートに来てくれて本当にありがとう！」と、心からお礼を言われた事であった。「ウイーンでの良い旅を願っております」との言葉も添えて。



国立オペラ座の正面玄関で



憧れの楽友協会

5、Airbnb で民泊

日本でも登録制で認められようとしている民泊というのがある。これはマンションや自宅の空き部屋を貸し出して、観光客を宿泊させる制度である。それを世界 192 カ国の 33,000 の都市にわたって展開している Airbnb という会社がある。現在 80 万以上の宿が世界中で提供されている。2008 年 8 月に設立され、サンフランシスコに本社があるそうだ。

日本も実際的には 2014 年から活動を展開して、既に 20000 人以上がホストとして、マンションや部屋を貸し出しているらしい。

実は私も数年前からこの Airbnb の会員登録(無料)をしている。まだ、貸し出したことも無ければ借りたことも無いが、いつか外国でマンションを借りて使ってみたいと思っていた。今回は 4 人で、ちょうど良い人数が揃ったこともあって、思い切って借りてみることにしたのである。

今回のツアーリーダーの M さんも快く承諾してくださったので、さっそくザルツブルグとオーストリア南部にある世界遺産の古い都グラーツで借りることにした。

インターネットで検索して、駅から近くて、しかも 5 つ星の評価をもらっているマンションを探し出した。

ザルツブルグのマンションは駅から歩いて 15 分、窓からはアルプスが見えて素晴らしい眺めだとの説明があった。貸出人は Maria という女性である。さっそく色々な事を問い合わせて、回答も分かりやすく感じが良かったので予約を入れた。

Airbnb は全てクレジットカードで決済の前払いシステムだ。これで一般人も安心して貸し出すことができるといえる。もしも、利用者をだましたり、案内の内容と大幅に違ったりすれば、事後の評価にすぐ反映できることになっているし、Airbnb の本部に連絡をして対処をしてもらうこともできるので、一応安心なのだ。

またユニークな点は、借りる方だけでなく、貸し出す方も宿泊客の評価をできることになっている。公開評価なので、予約をする時の参考になる。

言わば日本で人気のある「メルカリ」のシステムと同じだ。

ちょっと勇気が要ったが、クレジットカードで決済し予約が成立した。貸出人マリアからは駅からマンションまでの詳細な地図と、チェックインの仕方がメールで送って来た。無人チェックインらしい。

同じ様にグラーツでもマンションを予約した。このマンションは若い夫婦の経営で、自分達も同じ棟に住んでいるらしい。駅から近くスーパーもすぐのところにある、やはり評価は 5 星なので、さっそくクレジットカードで決済し予約した。

気になるお値段の方だが、どちらも 4 人で割って一人当たり 5000 円足らずでとってもお得な感じがした。

あらゆる家電、食器、ベッド、WIFI、全て揃って快適そうだ。旅の楽しみがまた膨らんだ気がした。



マンションではゆっくりとくつろげた



おしゃれな寝室

6、ザルツブルグのマンション

ウィーンに着いての第5日目は、列車でザルツブルグ観光に行く日であった。東京からの6人の参加者も一緒であったが、大きく異なる点は、私達熊本の4人だけが一泊して、翌日にウィーンに帰る事だった。東京の6人さんは日帰り旅行となっていた。

車窓に流れる美しい田園風景を楽しみながらの約2時間半の列車の旅で、ザルツブルグに到着した。ザルツブルグはドイツ語で「塩の城」の意味である。「塩」が重要なのは古今東西を問わず同じだ。ザルツブルグも周囲の岩塩鉱から産出される「塩」でローマ帝国時代から繁栄を続けて来たのだった。

モーツアルトの生まれ故郷、映画サウンドオブミュージックの舞台、ザルツブルグ音楽祭と、思えばこの町は3つの大きなことで余りにも有名である。

世界遺産の旧市街散策や、サウンドオブミュージックの撮影が行われた場所、モーツアルトの生家などをガイドの説明を聞きながら観光した後、私達4人は別行動を取ることにした。

Airbnbを通して予約していたマンションのチェックインは午後3時となっていたし、ウィーンに比べたら半分規模の小規模な都であるので、観光にゆっくり時間をかけてからマンションに行くことになった。

東京の皆さんと別れた後は、モーツアルトの生家をもう一度見直したり、高い丘の上にある美しいホーエンザルツブルグ城塞をゆっくり時間をかけてみたり、世界遺産の旧市街をぶらぶら散策したり、ふざけあったりして、5時近くまで遊んだ後、マンションに行くことになった。

あらかじめ、家主さんからの説明の入った地図をプリントアウトして持って来ていたので、それを声を出して訳しながら皆に道を探してもらった。説明書きにある通り、大きなスーパーが見えてきた。

PさんとMさんが、「ここで夕食と明日の朝食の買い物をしていこうよ」との提案をしたので、皆で買い物をすることになった。

EUではレストランに入るとすごく高くなるが、食材は安く、熊本価格かそれ以下である。ついつい、あれもこれもとなり、気が付くと、それぞれパンパンに膨らんだレジ袋を下げている。

その後、案内に書いてある道路の名前を探しながらマンションへと向かったが、途中でとうとう分からなくなってしまった。

イギリスでもこういう場所探しの経験は何度もしているのだが、オーストリアはドイツ語のせいもあって、標識も小さく、なかなか苦労した。

「重い、重い・・・」と無言の不平を言いながら歩くと、先の方に小さい洋服屋さんが見えたので、足早にその店に尋ねに行った。

その洋服屋の店主さんは大きく微笑みながら、詳しく教えてくれた。念押しで、外まで出てきてくれて、より詳しく教えてくれた。ザルツブルグの人達も本当に親切で、ウィーンに輪をかける程だった。店のお客さんもわざわざ外に出て、詳しく教えてくれたほどだ。

家主さんの案内所に載っているマンションの外観は、黄色い壁と紺色のバルコニー。それを見つながら、「重い、重い！」とそれぞれブツブツとつぶやきながら歩いて行くと、やっと目指す建物が見えてきた！

マンションに着いて先ずやらなければならない事、それはまず、前もって教えてある電話番号にダイヤルしないといけないことだった。さっそくスマホを取り出す。そして、無駄なコストを避けるため、日本からの余分な電話や自動更新などを防ぐためにオフにしていた、「モバイルデータ通信」をオンにしてから、指定してあった電話番号をダイヤルした。

「一回鳴らすだけでいいですよ。誰も出ないからコストはかかりませんので御心配ありません」と書いてあったように、電話の呼び鈴が一回なるとドアが「ピー」という音を立て始めた。音の鳴っている間にドアを押して中に入らなくてははいけない。日本でもマンションには馴染みが薄い私であるので、一度目は失敗した。

そこで再チャレンジをして、今度は無事に全員がマンションの建物内に入ることができた。

「あなたのお部屋は **3階**です」と、階数を間違わない様に色違いで書いてあったので、皆で「1階、2階、3階・・・」と重い荷物を抱えながら（これが最後のチャレンジだ）との思いで登って行った。

案内書のドアの写真には、エレクトリックキーの写真が載っていたので、それを目印に部屋を探した。エレクトリックキーとは、暗唱番号を入れると開いたり、閉まったりするようになっているキーである。

ところが、3階のどの部屋をさがしても、写真の様なエレクトリックキーのついたドアは無いのである！何度も行ったり来たりして探したけど、無い！

パニック度が上がった3人の中の一人が言った。「私達は騙されたとよ！もうお金は払い込んであるけん、それで終わりとよ！もう駅に帰ろうよ、そして駅の案内所でどこかホテルを紹介してもらおうよ」と言った。その人の気持ちはとても良く理解できたが、とっさに私は返答していた。「いいえ、騙されてません！」

そう言い切れる自信はあった。なぜなら、予約をしたのは2月半ばだったが、それ以来何度も、何度もメールのやり取りをし、詳細な返事をもらっていたからである。また、今からの社会、こういったオンラインの前払い決済のシステムは増えて行くだろう。それを疑い出すと、社会システム全てが信じられなくなる感じもしていた。

アメリカで使った「UBER ウバー」という民間タクシーのシステムも同じだった。公共交通が殆ど無いアメリカで、このUBERの存在は本当に助かったが、その経験からもこのシステムには自

信があった。

部屋が見つからないので、もう一度外に出て入り直すことになった。

重い荷物に苦勞しながら、階段を急いで降りて外に出た。

ちょうど向かい側のマンションに入ろうとする親子ずれの家族の姿が目に入ったので、思い切って若い母親に尋ねてみた。

プリントアウトしてきた案内を見せながら、

「私達、ここのマンションに泊まりに来たんですけど、部屋が見つからないんです。この建物はここですよね」

と言って、その母親に案内書を見せた。

その母親は「えー、ここですよ」と言ってにこやかに答えてくれた。

「でも、部屋が見つからないんです」と言うと、「じゃー、一緒に探しましょう」とついて来てくれることになった。小学低学年かと思われる息子も一緒に来た。

その若い母親と、息子と、私達3人はまた重い荷物を持って階段を登って行った。

1階、2階、3階と数えると、その母親はなぜかもう1階上に上がった。

「アー！！そうか！ヨーロッパでは1階が0階になり、3階は日本で言うと4階だったとよね！！」と、皆で思い出したように言い合った。

写真と同じエレクトリックキーのついた部屋が見つかった。

「あったー！！」と胸を撫で下ろしていると、その母親が言った。「キーを開けるのにはコードが必要です。コード知ってますか？」

「はい」と私は何の疑いもなく「予約コード」を教えた。母親はその予約コードを入力して開けようとしたが、開かない！

また、状況が混乱してきた。その母親は言った。

「何か数字をもらいませんでしたか？それがないと開きませんよ」

私：「えー？そう言えば・・・でも、ちょっと覚えてないです」

母親：「では、家主さんの電話番号わかりますか？」

私：「はい、ちょっとかけてみます」

スマホを取り出して家主にかけてみたが、変な音がするばかりでかからなかった。私は焦り出した。きっと日本経由の国際電話だったからだろう。

「じゃ、私がかけてみましょう」と言って、その母親は自分のスマホで電話をかけた。

(何と優しいのだろう！)と私は感動してしまった。日本ではこんな優しさは普通かもしれないが、外国ではあまりないのは、自分の経験が良く知っている。

電話がかかったらしく、そのお母さんはドイツ語で話し出した。

電話が終わったので、私が「分かりましたか？」と聞くと、

「今のは家主さんの妹さんで、家主さんに連絡をして私に電話をするように言ってくれるそうです」とのことだった。

数分して、彼女の電話が鳴り出した。またドイツ語での会話が始まり、終わった。

すぐに彼女はコードを入力し、ドアノブを回した。すると無事に、カチッと言う音がしてドアが開いたのだった！

皆が歓喜と安堵の声を上げた。私も安心して全身から力が抜ける思いがした。

その若いお母さんには、何度お礼を言っても言い足りない思いだった。皆があまり感激していたので、ちょっと恥ずかしそうにしながらその親子は帰って行った。

後で落ち着いてから、家主さんに連絡すべくスマホのSMSを開いてみると、何と午前中にちゃんとメッセージが入っていた。

「全て大丈夫ですか？御返事お待ちしております」

こちらに着いてから、高コストを避けるため、全て現地 wifi で通信していた。ウイーンからザルツブルグへの列車内では wifi が使えたが、列車を降りた後は使えない状態だった。当然メールもできない状態だった。

やはり自由旅行は、現地で wifi ルーターをレンタルしたが良いと反省した。

後で家主さんとそれまでやり取りしていたメールを調べた。そして、「重要メール」ファイルの中に、暗唱コードや建物の中の部屋の位置を詳細に書いてルメールを発見した。

「あー、そうだった！このメールは大切だから、PC からスマホに転送して来たんだった！」と思いついたが、時すでに遅しだった。

こんな重大なウツカリミスをするなんて、財布を盗まれたショックからか、やはり「古い」なのか、いずれにしても言い訳にしかならず、同行してくれた3人さんには本当に大変な思いをさせてしまったと、情けない気持で眠りについた。



サウンドオブミュージックの撮影に使われた
宮殿



遠くから見ると実に美しい城塞

エピソード

大変だったザルツブルグの宿の無人チェックインだったが、旅の終わりに4人で訪れたグラーツでは、多少の迷いだけで容易にチェックインできた。大きな理由は、家主さんが同じ建物内に住んでおり、鍵を手渡してくれた点にあると思う。無人化が進む今の社会だが、無人チェックインも普及してくることだろう。その頃は今回失敗のおかげで、難なくやれる自分になっているだろう。また、生活の多くの事が無人であるようになっていて、チェックインも無人が普通の事になっているかもしれない。

今、縁側に座ってこのエッセイをまとめている。庭には花が咲き乱れ、その上には青空が広がり、穏やかな春の時間がゆったりと流れている。

そして、耳に流れ来る音楽は、ザルツブルグの「モーツアルトの生家」で買って来たCDである。1991年の「モーツアルトウィーク」を記念して、モーツアルトが所有していたバイオリンとフォルテピアノを、モーツアルトが生まれた部屋で演奏・録音したものである。

この「神の調べ」に包まれていると、旅のシーンがフォトストーリーとなって思い出される。今回は、大きなハプニングを中心にエッセイをまとめたが、もちろん楽しい思い出は数えきれない。ウィーンの森散策の後、名も知らない公園のテーブルで、4人で笑い転げながら食べたサンドイッチ（話題はもちろん旅の失敗談）、楽友協会でのウィーンフィルによる「田園」の調べ、国立オペラ座での美しいバレエ、「リンク」という路面電車に乗ってウィーン市街を1周したこと、ザルツブルグの美しい湖と古城の風景、グラーツへ世界遺産になっている鉄道を通って行ったこと、ウィーン郊外にある温泉でのハプニング・・・等など、どれも口元が緩む楽しい思い出である。

時折り、旅の4人が集まることがある。話題が旅の失敗談になると爆笑タイムが訪れる。勇気ある一歩は大きな果実を持たらず。やはり旅とは不思議なものである。

何とも雑な旅エッセイとなってしまった。

最後に、内容の濃いこの2週間の旅を共有できた勇気ある3人の女性に、心からの感謝を述べつつ、キーを叩くのを終わりにしたい。

2017年 4月
田中成美

*旅の写真を編集した「フォトストーリー」をUTUBEにアップしています。御興味のある方はこちらへ→<https://youtu.be/qQOHrEftk4I>

